

あの棄てられた水族館を知っているかと噂は言う。

科学世紀の京都地下に張り巡らされた数多の地下道で装飾の施されていない区画はなく、カレイドスクリーンで海中の光景を映した地中水族館も例外ではない。優しい薔薇色となった海の中を魚群が翻りと反転に煌めき、その度に水中の縞模様となっている光がかき

乱されて拡散する。本物よりも本物に近い映像が足場以外の全方向を埋め尽くす擬似的な水中庭園の夢は今でもそれなりの人気を得ていたが、中でも廃棄され誰からも忘れ去られた所こそが舞台だと。

噂を聞け。鋭い非常灯の光と埃っぽい空気を着用した静寂が支配者となっている通路の奥深く、スクリーンはすべて剥げ落ち配管すらむき出しとなった壁の何処かに黒天鵞絨の黒となった場所がある。そこから魔女の住処へ行った者たちの顛末を聞け。

秘薬を持ち帰り肉体的な美を手にするも精神を引き裂かれた者がいる。願いの代価として要求された現代の合成食を手にして出入口を見失い、今も地下廃棄道を彷徨う者がいる。魔女に無礼を働き透明な鳥に全身を喰われて声だけになった者は、同じく噂を信じて近づく者の元へどこからともなく飛び来たり警句を発す

ること千夜に及ぶ。

噂の常で少し調べればそれら全てがありえざる事だと知れた。そもそも廃棄されたままの地中水族館というものは存在しておらず、何かしらの別物が跡地に建てられ塗りたくられていた。用済みとなって空いた場所を忘れたままという怠惰を二十二世紀の人間は許さなかつたのだが、痕跡すら抹消され写真や映像の記録でしか残されていない、もしくは人々の記憶の中にか息衝いていない場所へ何かの拍子に繋がってしまう事があるのはすっかり忘れていたようだった。

故に灯を持って廃棄通路に入ってきた秘封倶楽部の二人が噂に反して床に積もる埃の上に他人の足跡を見つけられなかつたのは当然だったのかもしれない。定間隔で壁に埋め込まれた青白い人工灯が照らす壁は青。出処のわからぬ埃も青。地に刻まれた二組の足跡もまた青く、ただ宇佐見蓮子の手にした筒型の携帯照明は白であつたせいで二つの少女の影は惑うようにゆらめいていた。やがて二人を包むように展開していた照明が蓮子の操作で絞られて一本の光束となり、マエリペリー・ハーンが意味ありげに指さした剥き出しの壁を動き回る。二人は笑つた。何しろ今夜の獲物が真であることを知つたのだから。

秘封倶楽部の知る噂は壁の向こうの魔女の住処を知っているかと弱々しげに囁く。そこは深い森。木々と

土と小さな生物の宴場であり、柔らかい道をたどった先に魔女がいるのだと。黒い壁をそつとなぞったメリーの指先が埃で白く汚れる。おそろくは彼女だけがそこに見る結界に沿つて。二人は手馴れていた。幻想へ飛び込むことに。そこが例え世界の終わりに見つめられる場所であつたとしても秘封倶楽部は暴き、飛び込まずに入られないのだ。

やがて向こう側へと抜けた秘封倶楽部を待つていた光景は噂に違わぬ場所、その夜だつた。天を衝くかと思わせるほどの豊かな巨木を筆頭とする木立の陰影の上には広い空間が持つ深い暗闇が広がり、閉じられた空間に生え茂る植物と土の濃密な匂いで満ちている。森の縁に彼女たちは立つていた。目の前に伸びている土を均しただけ小道からは微光がにじみ出し、背後の高い壁にびつしり描き込まれている嵐の海原か妖精の狩猟に見える流線も銀光を発している。頭上の空には星も雲も無く、やがて蓮子はそれが空ですらないことを指摘した。何しろ時刻も現在地も知ることができなかつたのだ。眼が慣れてくると空もどきもまたわずかに発光しているのが見てとれ、規模はわからぬまでも天蓋がこの地を覆っているのに気づいた。

ひそひそと道を進みだした二人の耳をくすぐる葉と枝の音に混じり靴底を厚くしておいて良かったとか以前行つた場所を思い起こさせるだとか言い合う少女た

ちの声がしばらく続き、やがて曲がった道の先にある開けた場所を確認すると声が止まる。そこには明らかに人工物が散見された。木製の椅子。広い机の上には明かりと影に塗りつぶされた物品の数々。そして人間。ゆつくりと歩いて来る秘封倶楽部に気づいたのか下を向いて馬鹿げた大きな本を読んでいた少女が顔を上げ、黒の三角帽子と金色の髪に沈んでいくように深く背もたれに体重を預けて言つた。

「道連れ付きとは珍しい。生まれ。用があるならその椅子に座れ。ないなら回れ右で振り出しの壁に触れろ」

快活な魔女の声に蓮子が応える。

「貴方に会いに来た」

「そんなことは分かつてる。用件を言え。言うまでテーブルにはつくなよ」

「貴方に会いに来た」

同じ言葉を返したメリーの声を聞いて魔女は悩ましげに目を細めたが、合点があつたのか片眉を上げた。

「噂好きか。初めてだがそういう奴は何処の世界にも居るんだな。新聞記者でもやつてるのか?」

「学生よ。メモを取りながらお話ししてもいいかしら。

魔女殿」

「いいとも。ついでに何か飲み物を献上する気はないか。毒以外なら喜んでいただくぜ。おい、待て」

メリーが取り出した手のひらサイズの厚紙のような物を指さして魔女が眉をしかめる。

「なんだそれは」

「メモよ。連れは古臭いノートと筆記用具だけど私は今風に仮想現実。コンタクトレンズで虹彩の動きを拾って浮いた光の板に文字を書き込むの。この強化紙は電源やらカメラやらが着いた起動鍵。興味があるならどういったものか説明もできるけど」

「結構だ。バルバロイって知ってるか」

警戒心を顕にした目つきで魔女は二人が椅子に座るのを見てから言った。

「ところで欲得すくじやない分あんたらは少し信用が足りないな。私を痛めつけて都合のいい談合にしないとも限らん。一度試してやるからその後で取引という」

返事をする間もなく魔女が立ち上がり背中を向けた瞬間そこへ別の女が立っていた。蓮子とメリーの心臓が二拍を打つ間に娘たちができた事と言えは呼吸のみ。女にとつても不意の出来事であったと見えて視線を左右に一度振ったものの、それだけで後は秘封倶楽部の方をじっと偷しそに見つめているのだった。女の身体は臃じみており三千丈よりなお遠くに見える山峰の切っ先さながらに儂げ。髪こそ魔女と同じ金色だったが現実の物とは思えぬ煌めきを秘めており、鋭い

目は星の光さながら。なによりも額から伸びる一本の角と発する雰囲気こそ異形に他ならぬ。

「では何故に呼び出したのかも知らぬままといい訳か」
巨きな盃から中身を飲み干して机の上に置き射干玉の声を女が投げかける。完璧に音をたてず為された動きの異常さを蓮子がいぶかしむ間に己の長い髪を一房つまみ眺めてから投げ出した。メリーはそこに光が散らばるのを見て呟く。

「鬼」

「そしてお前たちは人間の娘。鬼が娘を前にどうするべきか知らぬ訳ではあるまい？」

「それほど薄い身で私達に触れることができるかしら。どちらかと言えば幽鬼じゃない」

鬼が逡巡しながら己の掌の裏表を眺める間、挑発をたしなめるように動いたメリーの視線に蓮子は目の端の動きで答える。今この身は夢であり、いざとなつても自分は無事なのだからと。鬼の肩口をじっと見つめていたメリーは手にしていた厚紙を怪物の後ろへ滑り落とすように投げた。

「勇気ある子どもは常ではあるが」

鬼が微笑みながら中空へ指を一颯すると同時に己の脳をなぞられたのを感じた蓮子は未知の感覚に身震いし、次いで口も開けぬと知りついに恐怖した。

「愚か者と変わりない。触れずして触れるなど我々に

とつて造作もないのだよ。身体がまるで水のようにプヨついているのは認めるが」

「では貴方を戻す術を手にした子ども達はどうか？ それも今すぐに。どこへ戻るのは知らないけれど置かれた盃を手にする間もなく」

メリーが口を開く。

「知っているなら脳を撫でられた今すがら追い返したはずだ。それとも恐怖を感じていないと嘘でもつくか」

「なぜならば私たちは魔女に、貴方の主人に試してやると言われたからよ。盃はもらっておいてあげて。背中を見ればいいんでしょう？ 肩まで這い出している結界の隙間のようなものを見せるのが貴方達のタネ」

「おまえが動くより速く私は動けるぞ」

「貴方が動くより速く私は見るよ。その後ろへ投げた板には眼が付いている。カメラはご存知？」

メリーの一言が鬼の顔を静止させて三者間の緊張が沈黙によつて十分に膨れ上がると、妖女は喉だけで笑い始めた。その音がずいぶん楽しくそうだったので少女たちはつい聞き惚れてしまい、それを見て鬼はなお喜んで言った。

「脅かしてすまなかつた。勇敢な二人の名前を覚えておくれ。私は星熊勇儀。飲んでいた途中でいきなりこんな場所へ突っ張り食らった鬼だよ。私の主人とかいう奴の話も面白そうだ」

秘封倶楽部の名乗りを聞いてから語りはじめた勇儀によれば、彼女自身が望んでこの場所へ連れて来られているのではないと言う。突然呼び出されて人間と対面させられ始めたのは最近のことであり、暇つぶしに脅かしてはみるものの臆病な者ばかりでつまらなかつたと鬼は笑った。はじめてこつちへ来た時に妙な違和感を背中に感じたので人間に見てもらおうと振り向けば元の場所へ戻つた事。それから違和感は払拭されなものの本来居る場所では他の者に背中を見せることができたし大事はなさそうなので放っておいた事も語られた。次に秘封倶楽部がこの場所にいる経過を説明すると勇儀は一度瞳を閉じた。気高い豹さながらに「その魔女について心当たりはある。だが私の知る人間とは少し時間が違うね。居なくなつたなんて噂は聞いたこともないから、おそらく少し先の話になるんだろう。もしくは夢のまた夢と繋がっているのか」

「夢が夢を見るのか？」

メモを取りながら蓮子が聞いた。

「ああ。現も夢も表裏ならいいんだが捻れてしまうとそうもいかない。夢見る夢が生まれてしまふし現は現に目覚めてしまふ。入口と出口が同じ場所に繋がっている入れ子を想像できるかい」

「クライン体みたいになつてるのかしら」

蓮子が厚紙を取り出して指を走らせるとメリーが中

空を見てなるほど、と言った。その様は鬼は面白がる。

「不可視の式か。私にも見せてくれないか」

「ええと。専用の薄い膜を瞳に乗せないといけないんだけど今は用意できないかな。そもそも貴方の眼に嵌められるのかどうか。零れ落ちそう」

「ちよっと目を見せておくれ。へえ。玻璃を取り付けてそれを見るのかい。人間のやる事は変わらんが道具は変わってるもんだ。どんな付喪神ができることやら」

無意識に空の盃を顎のあたりまで持つていった鬼はそこで悲しそうな顔をした。

「酒は無いかな。そんな顔しなさんな。飲み始めた途端に酒が消えちまったらガッカリするだろう？ 私は今してるんだ」

「酒はないと蓮子が告げると勇儀はしよげ返った。

「帰るよ。あんたらは面白そうだけど今は酒だ」

「ならば何か見繕ってくるよ」

「おや。ならひとつ貸しを作っておこうか。約束を違えるんじゃないよ」

腕から垂らした鎖を鬼は鳴らした。

「こんな場所まで転がり落ちてきた魔女はききつと何かを探して来たんだ。乾いている者には何を与えるべきだろうね」

音一つなく鬼が振り返ったと思うや魔女がそこに戻

つてきており、二人の顔を観察した。

「私の背中を見せて逃げ出さなかったのは初めてだ。座っていいぜ」

「逃げるもなにも大したことなかったよ」

「それはどうも」

「星熊勇儀」

メリーの言葉に魔女の表情がくるくる変わる。

「私たちが何をしていたのか知りたいなら聞かせてあげるわ。どうやら何が憑いてるのか知らなかったんでしよう？ でも交換条件がある」

「待て」

「面倒な相手には背中を見せて追っ払っていたんでしようけれど今回はアテが外れたね。さあ。座って私たちの話し相手になって頂戴。お互いの益になる話し合いをしようじゃないの」

座った蓮子が机を指先で二回叩いた。

「いいか。あんたらはここに一度しか来られないんだ。

そんな奴らに深入りすると思うか。適当なことは話してやるが何もかもとはいかない」

「へえ」

大げさにメリーは肩をすくめる。

「なんで一度だけなの」

「知らん。だが餌をぶらさげて再会を約束してやった人間でも戻って来たことはないんだ。そっち側の入り

口がどうにかなってるんじゃないのか」

「どちらにしろもう一度ここへ来るのは簡単だけど」

「あらメリー。それは勘？」

「ええ。結界が閉じる訳じゃないでしょうし」

「待て」

「さつきから待てばっかりねえ」

「うるさいな。そっちのあんたは結界が分かるのか」

「見えるよ」

腕を組んで秘封倶楽部をじろじろ見ていた魔女はやがてぼそりと言った。

「そこそこ信用してやる。私は霧雨魔理沙。人探しに
来た魔法使いだ」

本日二度目の自己紹介をよどみなく終えた秘封倶楽部が聞くところによると魔理沙がこちらに来ることになった発端は一人の巫女が消えてしまったからだという。魔理沙との弾幕ごっこ（リアルなシューティングゲームのようなものだ）と蓮子は註釈をメモした）の最後に彼女は失われた。なんでも境界の移動を駆使した後にそのまま出てこなくなったのであり、まるで神隠しのようなだというメリーの感想に魔理沙は淡い苦笑をもって答えた。誰にも解決ができないまま時が流れていく中でついに魔理沙はひとつの仮説を思い立ち、知り合いに頭を下げ協力を頼んで回りあらゆる用意をしながら——このなかの鬼熊勇儀も含まれていたよう

だ——行方不明者の後を追いかけた第一歩目でここに立っていたのだと言う。

普段の魔理沙が森住まいだったのに加えてこの場所が人工的な、不自然な森であったのが幸いした。水と食物に困ることはなく無人であり、壁と最低限の文明的な生活設備が備えられた建物すらあったのだ。時折迷い込んでくる人間を口と魔法で煙に巻いて情報と物を巻き上げながら小さな魔女は持ち込んだ未解決の仮説の整理や魔法の実験をして今に至っている。

背中を見せることで相手の態度が怯えたものになるのを見つけたのは偶然だった。元に戻るまでに間に魔理沙の記憶は無くなるものの便利だったので利用し続け今日始めて何が起きているのかを知った。勇儀と同じく肩口に結界のような物が垣間見えるとメリーに指摘された魔女は顔をしかめて、鏡で見る分には普通の背中なんだがと唸った。

魔法について問われた魔理沙は手品程度のことしかできないと説明した。彼女の住む世界と比べて力と自分を結ぶ線の間谷のような物ができていると説明し、間に架け橋を確立しない限りは多くの技が切断されるか錆びたままだろうと。空は飛べないが人間を吹き飛ばすのは訳ないぞ、とも素早く付け加えたが。

「帰るアテはあるの」

「一応な。迷子を見つけたらこいつが標になるらしい」

服の中から取り出した鈴をちりんと振って鳴らした。魔理沙はメリーを意味ありげに見つめたが、彼女が首を横に振ると諦めたように頷いた。

「帰る手がかりになればと思ったがそう上手くはいかないか。取り敢えずここに居たんじゃ噂があかん」

ここ。まずはこの大温室を知るべきだと蓮子は主張した。科学世紀の少女たちの持つ端末に情報は入らず、天蓋に広がる闇は蓮子が見上げても夜空のように返事を返さぬ。

「おいそれとゆりかごを暴いてくれるなよ。少なくとも大勢の人間がやって来るようなことになる」と面倒極まりないからな。一つだけわかっていることを教えてやるから。私も気になって天蓋の外をへばりついて見ようとしてな。向こう側に居るやつらと目があつたのさ」

「何かいるの？」

「ああ。魔法書の挿絵で見たような気がするよ。魚さ。口に入れたくないような形をしたやつばかりでな。スケッチは……これだな」

紙に殴り書きされたいくつかのシルエットを見て秘封倶楽部は悟った。特徴的なフォルムを持つ魚は深海に棲むものの他になく、つまり外に広がるのは深海なのだ。

ここは深海に建築された植物庭園なのだろう。光が届かぬ程度の大陸棚にドーム型の海底基地が作られる

のは珍しいものの絶無ではなく、ここはそうした施設の中で棄てられたうちのひとつなのだと推察された。何かの手違いで稼働し続けてしまっている海底の植物園はおそらくは金持ちの道楽か何かだったのだろうという意見に落ち着いた。植物相を見ている魔理沙が断定したのだ。

知れる事と言えばそこまでであった。この一夜にしては上出来。焔炉と漉し器にて魔理沙が淹れた茸茶も底を見せた頃、しばらく沈思していた三人は別れることに決めた。

「私はこの植物園が何処にあるのか、もしくはあつたのか調べてみる。メリーも付き合う？」

「私は縁探しの神様めぐりをしようかな。巫女が私たちの世界にやって来てるかもしれない」

「レンコはくれぐれも慎重にな。マエリ……ペリーには疲労回復の粉を持たせてやろう。割と効くぞ。あー？ いらぬい？ ふーん。」

そうだ。私用に外の知識で使えるような物を持つてきてくれよ。結界や時空間に関する物。重力に関する物も欲しい。巫女は色々浮かんでるんだ。重力から解き放たれたと評される程度にな。できれば本がいい。あんならどうこうは魔力を吸い取られそうだな」

「わかった。新品のコンタクト探しくわね。除菌済みの」

「人の話は聞くもんだぞ。黒いの」

その夜を境に彼女たちは跋扈を始める。鍵が錠前を外したのだ。

噂は言う。魔女のそばに人が居ると。それは一人なしいは二人の少女であり、魔女の意思を受けてさまざまな世界へ旅立っているのだと。特定の時間になると無重力を生み出す炭鉱跡地の深い陥穽を訪れた。位相がずれて地上へ落下し続けるはめになった人工衛星の中へ向出した。地球の重力の中心である地核へ渡った。灯をめざす蛾のごとく物語は群がる。

それとは別に魔女は一人のままであり、使役する鬼と住処へ籠もり続けて探し続けたとも言われている(何を?)。

噂が噂に尋ね回り、その横を事実は一顧だに与えず歩み去る。三の三倍あるいは五の五倍の夜が魔女と鬼と秘封倶楽部を出会わせては過ぎていった。

結局のところ温室の結界を越えて魔理沙は抜け出すことができなかつた。奇しくも彼女自身が言い放つた籠さながらであり、建設された場所も絞り切れないのかもしれない。京都の地下水族館と同じく存在していないのかもしれぬ。ただ調査の過程で植物園に使用されている技術の数々は判明していき、疑いなく秘封世紀の生きる世界の物であることは知れた。深海の圧力に耐えうる天蓋は寄木細工や螺鈿のようにして散りばめられた

金属板の集合体であり、組み合わせの僅かな隙間を埋める液体金属によって全体がゆっくりと流動している。潮流などで変化する外圧に対応させ同時に視覚的な変化を両立させていたのだ。内側は発光と熱反射の時間によって調節し、おそらく海と触れる外側は黒玉じみた外見をしていることだろう。

魔理沙が寝泊まりに使っている小さい建築物で外部から完全に隔離された管理システムを見つけたものの、浮かび上がった光学立体モニターに出てくる文字列がイギリス文字・アラビア文字・漢字・キリル文字にデーヴァナーガリーとヒエログリフまで混在しているのを確認したところで秘封倶楽部は解読を諦めた。彼女たちの専攻に暗号解読は含まれていない。

庭園の世話をしている不可視の自動機械は勇儀がその存在を示唆した。決して人に近寄らない小さい物が潜んでいると或る一夜に鬼は言ったのだ。

それは足場の取り付けられた捻れた大木に鬼と秘封倶楽部が腰掛けていた時のことで、登り降りに多少難渋するのを除けば景観と座り心地は十分に満足できる場所だった。仮定が取れたと自動機械の存在をメモから消している蓮子の横目に鬼は自らの住処を地獄と言った。棄てられた地獄の構成や忌避される住人たちの話で盛り上がると、秘封倶楽部が持ってきた蒸留酒を全て盃に流して鬼は一息に呷った。

「いい火酒だ。たまの世界にはたまの酒が在るもんだね」

「お返しをくれてもいいわよ。神通力とか金銀財宝」
メリーが睨らう。

「それは勝負をして私が負ければ考えよう。相撲ができればいいんだけど、私だけがそつちを投げ飛ばせしてしまうこの姿だと不公平だ」

「元の肉体でも不公平」

「飛車角金銀桂香落ちくらいはしてやるよ」

「それはどうも。案外と真面目で律儀ね」

「鬼だからね」

「じゃあ魔理沙に何が起きているのか教えて頂戴」と
蓮子。「見当は付いてるんでしようか」

勇儀は蓮子を見た。鬼の瞳は頁岩けいがんであり悲しみが含まれているようでもあった。常に大岩がそうであるように。

「魔理沙はたどり着けなかった。だから呪われている」
盃の中で酒を転がしながら言った勇儀の声音に木々は静まり返った。

「多くの妖怪や神の力を借りて失敗してしまった。少なくとも私は力を貸したんだらう？ 鬼が与える力は無償のものではないよ」

蓮子の顔がこわばる。
「代償を返されるのね」

「合力と呪いに差がない奴らも多いからね。これから先成功するかどうかじゃない。もう失敗してるのがマズいんだけど」

勇儀は天頂を見上げた。

「こんな場所にいたんじゃあ債鬼も来ないか。不幸中の幸いだよ」

「私たちに出会えたこともそうだといいたいけれど」

答えず無言で盃に飾られた北斗を見る勇儀にメリーが聞く。

「貴方からすれば蠅螂の斧つてところかしら」

「あんたらは立ち向かう気力と知恵が多少はある。それは認める。ただ斧ではなく香気だ。芳しさすら発して私たちをそそる人の抵抗。誰に飲み下されるのかわかってるのかい？」

とは言え私も斧にはなれない。こんな狭間へ落ちこんで千切れた力と呪いの果て。間抜けな魔女に何とか残された一糸が捻れて繋いだ鬼の幻にすぎない私だ」

最後の酒を継ぎ足し盃を傾けて鬼は続けた。星が眠るとするならばそれは海底でなければいけないと。空ではないけない。一切の光を厭う深い水底に眠る幾千の海星は万古の昔に空から落ちてきた星であり、横たわるわだつみが岩の衣に付ける幾億の宝石は星の化身である事が自明なのだから。星の魔女がここにいるのは道理だと星の鬼は歌うように言った。事実歌っていた

のかもしれないが人間の少女らには分からなかった。思えば鬼の歌を不吉だと秘封倶楽部は思うべきだったのだ。

最初に酷薄な事実を受け取ったのは大学内の蓮子だった。振られた賽のごとく手軽に、それでいて有無をいわさぬ情報は直ぐにメリーと共有されて魔女の森へは咎のようにして携えられた。

「最終問題における一つの解答が少しだけ進歩したの」眉をひそめる魔女の顔を弱々しく見つめる蓮子の指が小さく揺れる。

「私たちの世界だと宇宙の終わり方がいくつも予想されていて、私はそれに関するその学問に近しいものだから知ることができたの」

「らしくないな。要領が悪いんじゃないか」

「貴方が探している巫女はよく紅白と揶揄されたそうね」

割って入ったメリーの一言が波紋となつて魔理沙の表情に広がっていく。波は矛盾で作られていた。すなわち予測と拒絶。メリーに促された蓮子が続ける。

「予測が出たの。宇宙収縮説の最後。この宇宙が収縮しきる直前はいい」

蓮子は一回のどを鳴らす。

「いったい何色になるのかという」

「嘘だろ」

「貴方が来て出てきた仮説よ。急にね」

宇宙の終わりについてはいくつかの説が生み出されていたが、いま持ち出しているのはビッグクランチと呼ばれる収縮説だと蓮子は言う。目新しくもない説でありそこへ色が追加されただけではあった。まるで視覚してきたと言わんばかりの新しい仮説は鉄とニッケルおよび新しい原子核がどのように紅と白を生み出すかを細かに、少なくとも蓮子程度の頭脳には至極もつとも思える論を展開していた。

「魔法数からズレている安定した原子核の発見がキモなの。その原子核に付けられた名前が」

「待て。やめろ。因果がおかしいだろ」

「こちらへ来る際に貴方が願ったのは何だったの。誰を探しに来たの」

願いはかなえられていた。ある意味で。ゆるやかな天蓋の回転の下で完璧な沈黙の翼が広げられる。やがてそこから自力で迂り落ちた魔女は森より静かな目をして言った。

「たしかに何事にも縛られてないな。あいつらしいよ。私は人探しを進めるとするか」